

万葉集2120番歌の「秋芽子恋不尽跡」の訓釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the First and the Second Phrases of the 2120th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集2120番歌の原文は「秋芽子 恋不尽跡 雖念 思恵也安多良思 又将相八方」であるが、通説ではこれを「秋萩に 恋尽くさじと 思へども しゑやあたらし またも逢はめやも」と訓読し、「秋萩への恋を尽くすようなことはするまいと思うけれども、ええい、やはり惜しい、また逢うことができようか」と解している。その際、第二句の「恋尽くす」は「心を奪われるほどに愛する」や「恋心のありたけを尽くす」などの意に解されている。

ところが、このような解釈には問題がある。通説に従えば、この歌の骨子は「秋萩ごときには心を奪われたくないと思うけれども、萩の花が散ってしまうのはやはり惜しい」となる。この歌の作者はよっぽどの「ひねくれ者」だろうか。もし歌の前半部「秋萩ごときには心を奪われたくない」というのが本心であるならば、後半部は「いっそのこと萩の花など早く散って欲しい」となるのではなからうか。通説の解釈は、素直な万葉人の詠んだ歌とはとても思えない内容である。本論文では、通説の訓釈の問題点について再検討した上で新しい訓釈を提案する。

1. はじめに

万葉集2120番歌は巻十の「秋の雑歌」の「詠花」に分類された34首の中の一詩である。この歌の訓釈については古来ほとんど問題になった形跡がなく、どの注釈書でもほぼ似た内容となっている。本論文の目的は、特にこの歌の第一句と第二句の訓釈について再検討し、新しい訓みと解釈を提案することである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう〔1〕。

10/2120 秋萩に 恋尽くさじと 思へども しゑやあたらし またも逢はめやも

【原文】秋芽子 恋不尽跡 雖念 思恵也安多良思 又将相八方

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるために内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

① 新日本古典文学大系^[1]

【現代語訳】秋萩への恋を尽くすようなことはするまいと思うけれども、ええい、やはり惜しい。また逢うことができようか。

【注釈】「しゑや」、既出（六五九・一九二六）。「あたらし」、既出（一六九三）。

② 新編日本古典文学全集^[2]

【現代語訳】秋萩ごときに 心を奪われまいと 思うけれど いややはり惜しいことだ また果たして逢えようか

【注釈】秋萩に恋尽くさじ この恋はこのあとの二二二の「秋萩の恋」と同じ。この恋ヲ尽クスは、心を奪われるほどに愛する意。 しゑやあたらし シエヤ 一九二六。アタラシは事物が消失・衰滅することを惜しむ気持ちを表す形容詞。ここは萩の花盛りが終わることを残念に思っている。 またも逢はめやも 萩を擬人化し、再会を期し難いと危ぶんだもの。

③ 講談社文庫（中西進）^[3]

【現代語訳】秋萩に恋うて、あれこれ物思いをすまいとは思うのだが、やはり散るのは惜しいことだ。散ってしまったばまた花を見ることがどうしてあろう。

【注釈】秋萩に恋ひ尽くさじ 恋心を尽くす。さまざまに恋う意。 しゑや ままよ。感動詞。 またも逢は（めやも） 再びの開花に。

④ 萬葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【現代語訳】秋萩に対して恋心のありたけを盡すというやうな事はすまいと思ふけれど、えゝまあ、やはり心が惹かれるよ。また逢ふことが出来ようか。散つてしまつたらまた見る事は出来ないのだから。

【注釈】秋萩に恋盡さじと思へども 古義に「芽子に、さのみ心を盡すまじとはおもへども、と云なり、賞愛のあまりに、雨風などに付ても、さまざまに心をなやますが、恋を盡すなり」とある。恋のありたけを盡すまい、の意。「年の恋今夜盡して」（二〇三七）の意味とは同じでない。

しゑやあたらし 「しゑや」は既出（一九二六、四・六五九）。「あたらし」も既出（九・一六九三）、愛惜の切なる意。

又も逢はめやも 旧訓マタアハムヤモ、細左にアハメヤモとあり、略解にマタアハメヤモを採つて以来諸注従つたが、結句にアの単独母音音節があるから「^{マタモアハメヤモ}亦毛相目八毛」（一・三一）「^{マタモアハメヤモ}亦毛相目八方」（二・一九五）の如く、古典大系本にモを訓添へたのがよい。ここは花が散つたらまた逢はうか、再び見る事が出来ない、の意。

⑤ 日本古典文学大系^[5]

【現代語訳】秋萩などに自分の恋心を傾け尽したりはすまいと思うけれども、ええ、まあ、あんまり美しくてほっておけない。二度とこうした美しい花に逢いはしないだろうから。

【注釈】恋ひ尽さじ 自分の恋心をすべて傾け尽したりはすまい。 しゑや 間投詞。決意・断念・放任をあらわす。 惜し あまり美しいのでこのままにするのが惜しい。 二・一〇六九補注。 また

も逢はめやも 再び逢うであろうか、逢わないであろう。

以下の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点について指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな訓釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

前節に示した先行研究には少なくとも三つの問題点がある。第一の問題点は、原文の発句と第二句「秋芽子恋不尽跡」の訓読に関するものである。万葉集には「萩」に関する「恋」の歌が、2120番歌を除外すると、7例ある(1364、1365、2122、2124、2145、2209、2228番歌)。その中には「萩に恋ふ」や「萩に恋尽くす」という表現は一つもない(活用語尾の変化形も考慮)。一方、この7例中に「秋萩の恋」という表現が2例ある(2122、2145番歌)。この事実を重視するならば、「秋芽子 恋不尽跡」は通説のように「秋萩に恋…」と訓むのではなく、「秋萩の恋…」と訓むべきではないかという疑問がわいてくる。これが第一の問題点である。

第二の問題点は、第二句の「恋尽くす」の語義に関するものである。前節の④の注釈は、「恋尽くす」の意味として、万葉集古義の「秋萩の花を賞愛するあまり、雨風などで花が散りはしないかとさまざまに心を悩ます」という説に賛同し、「恋心のありたけを盡す」と口語訳している。ほかの注釈書も、②の「心を奪われるほど愛する」、③の「あれこれ物思いをする」、⑤の「恋心を傾け尽くす」などそれぞれ表現は違うものの、その意味する内容は④とほぼ同じだと思われる。

しかしこれらの解釈は、「恋尽くす」という言葉が「恋」と「尽くす」の複合語であることを無視しているように思われる。「尽くす」は「ものが無い状態にする」という意味である。例えば、「言尽くす」(661番歌)は「すべて言いたいことを言い尽くして、ほかに言いたいことはもう何も無い状態にする」という意味である。一方、万葉集をはじめとする上代語の「恋」の意味は、「相手が目の前にいないのを淋しく思い、求めたう心」である。「時代別国語大辞典」は「こひ(恋)」について次のように説明している(下線は著者による)([6] p. 305)。

万葉集に恋を表わすのに「孤悲」という字をあてたものが三〇例ほどあり、この表記は恋^{こひ}というものがどう考えられていたかを端的に示している。それは相手が目の前にいないのを淋しく思い、求めたう心である。人についていうことのほかに花や鳥、自然の景物についていうことも多い。

以上のことから、「恋尽くす」の語義は、「尽くす」と「恋」の意味を組み合わせ「恋しい気持ちを尽くして無くする」となるはずであり、補足して次のように言うこともできるだろう。

長い間逢えずに「恋しい」と思う状態が続き、その後やっと逢う機会にめぐまれ、逢っている(わずかな)間に、それまで長い間に積もった「恋しい」思いを解消(尽くして無く)すること

あるいは、相手と直接逢ってひと時(多くの場合は一夜)を過ごすことにより(一時的ながら)満足し、しばらくは「恋しい」という思いが無い状態にすること、と言い換えてもよいだろう。また、恋の対象が人間でなく「花」の場合は、「恋尽くす」の語義は次のようになる。

花が咲くのを長い間ずっと「恋しく」待ち続け、やっと咲いた花を、散るまでのわずかな間に賞美し、それまで長い間に積もった「恋しい」思いを解消（尽くして無くする）すること

さて、ここで問題になるのは、このような語義が果たして実際の歌の文脈にうまくあてはまるかどうかである。この点を確認するために、万葉集中から「恋尽くす」およびそれと類似の表現である「恋を尽くす」、「恋も尽く」の用例をすべて挙げてみた（ただし、2120番歌は除外）。最初の三首は七夕の歌で、2032番歌の第四句と第五句は異伝歌のものである。

- 10/2032 一年に 七日の夜のみ 逢ふ人の 恋も尽きねば さ夜そ明けにける
 10/2037 年の恋 今夜尽くして 明日よりは 常のごとくや 我が恋ひ居らむ
 10/2089 ... あらたまの 年の緒長く 思ひ来し 恋尽くすらむ 七月の 七日の夕は 我も悲しも
 10/2145 秋萩の 恋も尽きねば さ雄鹿の 声い継ぎい継ぎ 恋こそ増され
 10/2303 秋の夜を 長しと言へど 積もりにし 恋を尽くせば 短かりけり
 11/2442 大土は 取り尽くすとも 世の中の 尽くし得ぬものは 恋にしありけり

ここに示した六首の下線部に注目すると、いずれも先に示した「恋尽くす」の語義がそのまま文脈にあてはまることが確認できる。すなわち、この六首の「恋尽くす」はいずれも、「相手と逢っている（花を賞美している）短い間に、それまで逢えなかった長期間に積もった恋しい思いを尽くして無くすること」と解することができる。

だとすれば、今問題にしている2120番歌の「恋尽くす」もまたこれと同じ意味でなければならない。ところが通説は、この「恋尽くす」を、「心を奪われるほど愛する」や万葉集古義に従って「秋萩の花を賞愛するあまり、雨風などで花が散りはしないかとさまざまに心を悩ます」の意に解しており、これらの解釈には「尽くす」の意味が考慮されてないばかりか、風雨で花が散りはしないか気にすることを「恋」と解するなど、上代語の「恋」の語義が無視されている点でも問題がある。実際、上にあげた六首のうち2089番歌以外の「恋尽くす」は、通説の語義で解釈すると明らかに違和感がある。これが第二の問題点である。なお、上代語の「恋」の語義については姉妹編の論文も参照されたい〔7〕

次に、第三の問題点を指摘しよう。実は、すぐ上で通説の「恋尽くす」の解釈には問題があることを指摘したが、以下ではこの点には目をつぶり、「恋尽くす」は通説のとおり「心を奪われるほど愛する」や「（秋萩の花）が風雨で散りはしないか心を悩ます」という意味であると仮定して話を進めよう。問題は、そのような解釈で本当に歌の意味が通るかどうかである。

通説によると、歌の発句から第四句までの内容は「秋萩のことなどそれほど気にかけてくはないけれども、（萩の花が散ってしまうのは）やはり惜しい」となる。あるいは「秋萩ごときには心を奪われるまいと思うけれども、（萩の花が散ってしまうのは）やはり惜しい」となる。これでも一応歌として意味は通るかも知れない。しかし、もしこのような歌を詠む人がいるとすれば、よっぽどの「ひねくれ者」である。なぜならば、もし本心から「秋萩ごときには心を奪われたくない」と思い、かつ「素直な人」であるならば、「秋萩ごときには心を奪われたくないので、いっそそのこと萩の花など早く散ってしまって欲しい」という歌を詠むはずだからである。通説の解釈は、素直な万葉人の詠んだ歌とはとても思えない内容になっている。これが第三の問題点である。

3. 万葉集2120番歌の新しい訓釈

この節では、まず新しい訓釈の結果を示し、その後で具体的な根拠を確認していくことにしよう。まず2120番歌の原文、訓読、直訳、意識を示す。

【原文】秋芽子 恋不尽跡 雖念 思恵也安多良思 又将相八方

【訓読】秋萩の 恋も尽きじと 思へども し系やあたらし またも逢はめやも

【直訳】「秋萩の恋」も(まだ当面は)尽きるまいと思っているのに、(もう花が散ってしまった)、ああ、惜しいなあ、(こんな美しい秋萩の花に)再び逢うことがあろうか... もう二度と逢うことはないだろう。

【意識】やっと待ちに待った秋萩の花が咲いたので、何度も見たり手に取ったりして賞美し、「秋萩の恋」これまで長い間、花が咲くのを「恋しい」思いでずっと待ち続けてきた、その積みもり積みもった恋の思いを解消しようと努めているが、まだ当面はその思いを完全に解消し尽くすこともあるまいと思っているのに(心ゆくまで賞美し尽くすにはまだ時間がかかると思っているのに)、もう秋萩の花が散ってしまった。ああ、惜しいなあ。こんな美しい秋萩の花には二度と逢えないだろうに。

前節で指摘した三つの問題点は、上の新しい訓釈ではすべて解消されている。そこで、これからやるべきことは次の二点である。第一に、2120番歌の原文の初二句「秋芽子 恋不尽跡」が「秋萩の 恋も尽きじと」と訓める根拠を示すことである。第二に、上に示した「直訳」あるいは「意識」の内容が当時の万葉人たちの感性に合っていることを示すことである。そのためには同じ内容の歌がほかにも存在することを示せばよい。

まず第一の課題から検討しよう。実は、2120番歌の初二句とよく似た表現をもつ歌が同じ巻十の「秋の雑歌」の中に存在する。2145番歌の訓読文と原文を新日本古典文学大系に従って示す([1] p. 500)。

10/2145 秋萩の 恋も尽きねば さ雄鹿の 声い継ぎい継ぎ 恋こそ増され

【原文】秋芽子之 恋裳不尽者 左壮鹿之 声伊続伊継 恋許増益焉

ここで2120番歌の「秋芽子 恋不尽跡」と2145番歌の「秋芽子之 恋裳不尽者」を比較すると、両者は非常によく似ており、もし前者に助詞「之」と「裳」を補うことができれば「秋芽子之 恋裳不尽跡」となり、「秋萩の恋も尽きずと」または「秋萩の恋も尽きじと」と訓めることになる。このように助詞を補って訓むことができることは、2120番歌と同じ巻十の「秋の雑歌」の「詠花」の歌群(2094~2127番歌)の中に、同じように助詞を補って訓む次の歌が存在することからも確かめられる。

10/2104 朝顔は 朝露負ひて 咲くといへど 夕影にこそ 咲きまさりけり

【原文】朝兒 朝露負 咲雖云 暮陰社 咲益家礼

この歌の原文では「は」「て」「と」「に」に相当する四つの助詞が省略されていることがわかる。

そこで次の問題は、2120番歌の「秋芽子恋不尽跡」を「秋萩の恋も尽きずと」と訓むか、それとも「秋萩の恋も尽きじと」と訓むかである。これは第三句「思へども(雖念)」への続き方を調べることによ

て解決する。万葉集には「～じと」の後に動詞が続く例は、例えば、「玉の緒の 絶えじと思ふ 妹があたり見つ」(2787番歌)のように多数あるが、「～ずと」の後に動詞が続く例はない。したがって、2120番歌の初二句は「秋萩の恋も尽きじと」と訓むことが確定する。

最後に、残された第二の課題を検討しよう。この節の最初に示した2120番歌の「直訳」あるいは「意識」の内容が当時の万葉人たちの感性に合っているかどうかを示すことである。それには次の歌を示せば十分であろう。

10/2118 朝霧の たなびく小野の 萩の花 今か散るらむ いまだ飽かなくに

この歌の結句「いまだ飽かなくに」という表現は、2120番歌の「(秋萩の)恋も尽きじと思へども」という表現と実質的に同じ内容である。実際、「いまだ飽かなくに」ということは「秋萩の恋の思いがまだ完全には尽くされていない」ことにほかならない。2118番歌と2120番歌はいずれも、心ゆくまで賞美し尽くさないうちに秋萩の花が散ってしまうのを惜しむ歌であり、この二人の作者の気持ち(感性)はほとんど同じである。

4. おわりに

本論文では、万葉集2120番歌の訓釈について再検討を行い、まず原文の初二句「秋芽子恋不尽跡」の訓読について、通説のように「秋萩に 恋尽くさじと」と訓むのではなく、「秋萩の 恋も尽きじと」と訓むべきであることを指摘した。次に、その意味について、「秋萩の花が咲く前から、早く花が見たいと長い間恋い続けてきた秋萩の恋の思いが、まだ十分解消し尽くされていないと(思うのに)」と解すべきであることを提案した。以上のような指摘や提案が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をお待ちしたい。

参考文献

- [1]「万葉集 二」, 新日本古典文学大系、岩波書店、p.494、2000年。
- [2]「万葉集③」, 新編日本古典文学全集、小学館、p.105、1995年。
- [3]「万葉集 原文付全訳注(二)」, 中西進、講談社文庫、p.362、1980年。
- [4]「万葉集注釋 卷第十」, 澤瀉久孝、中央公論社、pp.330-331、1962年。
- [5]「万葉集 三」, 日本古典文学大系、岩波書店、pp.110-111、1960年。
- [6]「時代別 国語大辞典 上代編」, 三省堂、2005年。
- [7]竹生政資・西晃央、万葉集1425番歌の「恋」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第15集第2号、pp.77-84、2011年。